

# 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺 (金閣寺) 庭園

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび排水主管改修工事および高圧電気引込ケーブルルート替工事に伴います特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

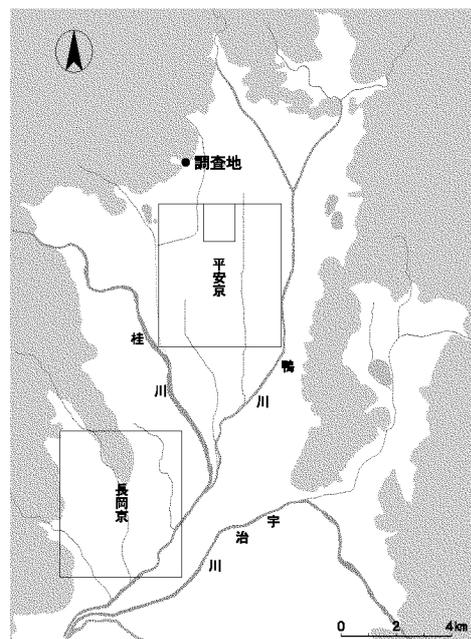
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成15年12月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- |            |  |
|------------|--|
| 1 遺 跡 名    | 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園                     |
| 2 調査地点所在地  | 京都市北区金閣寺町1番地 鹿苑寺（金閣寺）境内                  |
| 3 委託者及び承諾者 | 宗教法人 鹿苑寺 代表役員 有馬頼底                       |
| 4 調査期間     | 2003年8月18日～2003年10月10日                   |
| 5 調査面積     | 98m <sup>2</sup>                         |
| 6 調査担当職員   | 高橋 潔                                     |
| 調査協力       | 西大條 哲・上田栄治                               |
| 7 使用地図     | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「衣笠山」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系    | 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）        |
| 9 使用標高     | T.P.：東京湾平均海面高度                           |
| 10 使用基準点   | 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。          |
| 11 使用土色名   | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。       |
| 12 遺構番号    | 調査中に付した遺構番号をそのまま使用した。                    |
| 13 遺物番号    | 本書掲載の順に通し番号を付した。                         |
| 14 写真撮影    | 村井伸也・幸明綾子                                |
| 15 基準点測量   | 宮原健吾                                     |
| 16 整理作業    | 高橋 潔・近藤知子                                |
| 整理協力       | 小森俊寛                                     |
| 17 編集・執筆   | 高橋 潔                                     |



（調査地点図）

# 目 次

1 . 調査経過	1
( 1 ) 調査に至る経緯	1
( 2 ) 調査の経過	2
2 . 調査地の位置と環境	3
( 1 ) 歴史的環境と立地	3
( 2 ) 既往の調査	3
3 . 調査の概要	5
( 1 ) 調査区	5
( 2 ) 層 序	9
( 3 ) 遺 構	9
4 . 出土遺物の概要	14
( 1 ) 土器類	15
( 2 ) 瓦 類	16
5 . ま と め	18

# 図 版 目 次

図版 1 遺跡	1 第 1 区 第 1 面全景 ( 南から )
	2 第 1 区 第 2 面下層全景 ( 北から )
	3 第 1 区 西壁断割り断面 ( 北東から )
図版 2 遺構	1 第 2 区 南北溝上層 ( 北から )
	2 第 2 区 南北溝完掘状況 ( 北から )
	3 第 3 区 東部第 2 面検出状況 ( 東から )
	4 第 3 区 西部第 2 面検出状況 ( 南東から )
図版 3 遺構	1 第 4 区 第 1 面検出状況 ( 東から )
	2 第 4 区 第 2 面検出状況 ( 東から )
図版 4 遺構	1 第 4 区 南壁断割り状況 ( 北東から )
	2 第 5 区 第 2 面検出状況 ( 北から )
	3 第 6 ~ 7 区 第 1 面全景 ( 東から )
	4 第 6 区中央 ~ 第 7 区 第 2 面全景 ( 東から )

- 図版 5 遺構 1 第 6 ~ 7 区 礎石建物検出状況 (東から)  
 2 第 6 ~ 7 区 礎石建物検出状況および北壁断面 (東から)
- 図版 6 遺物 1 整地層 出土土器  
 2 整地層 出土土器  
 3 整地層 上面出土土器
- 図版 7 遺物 軒丸瓦
- 図版 8 遺物 軒平瓦・熨斗瓦

## 挿 図 目 次

図 1	調査位置図 ( 1 : 5,000 )	1
図 2	第 1 区 調査前全景 (西から)	2
図 3	第 2 区 作業風景 (北から)	2
図 4	第 6 区 重機掘削 (東から)	2
図 5	既往調査区および本調査区位置図 ( 1 : 2,000 )	4
図 6	調査区全体図その 1 (第 1 面、 1 : 200)	6
図 7	調査区全体図その 2 (第 2 面、 1 : 200)	8
図 8	第 1 区遺構実測図 ( 1 : 50 )	10
図 9	第 4 区遺構実測図 ( 1 : 50 )	11
図 10	第 6 ~ 7 区遺構実測図 ( 1 : 50 )	12
図 11	土壌 SK 4 - 3 検出状況 (北東から)	13
図 12	出土土器実測図 ( 1 : 4 )	15
図 13	出土軒瓦拓影・実測図 ( 1 : 4 )	17
図 14	出土熨斗瓦実測図 ( 1 : 4 )	18

## 表 目 次

表 1	既往調査一覧表	5
表 2	遺構概要表	13
表 3	遺物概要表	14

# 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園

## 1. 調査経過

### (1) 調査に至る経緯

調査地は、京都市北区金閣寺町の鹿苑寺(金閣寺)の境内にあたる(図1)。当寺の現境内地は全域が1925年(大正一四)に国の特別史跡および特別名勝に指定されている。

この度、境内の東半、総門の北東域において、排水主管の改修工事と高圧電気引込ケーブルのルート替工事が計画された。特別史跡・特別名勝内におけるこれら現状変更在先立ち、工事掘削に伴って遺構などの破壊が予想される範囲内について発掘調査を行うこととなった。発掘調査は、京都府教育庁教育委員会文化財保護課および京都市文化市民局文化財保護課の指導の下、(財)京都市埋蔵文化財研究所が担当した。調査区は工事掘削範囲そのものとなるので、工事業者による線引きを元に、それをそのまま調査区とすることにした。

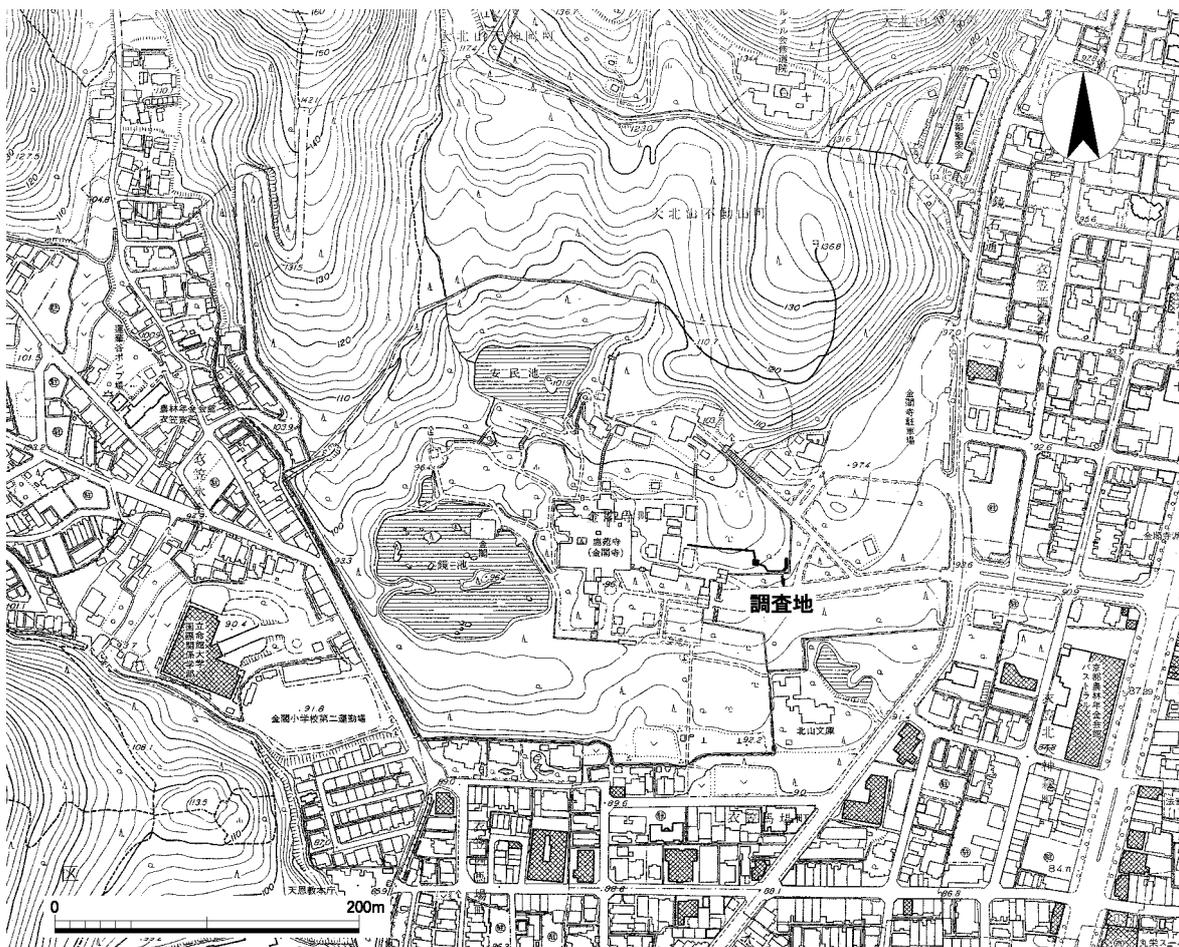


図1 調査位置図(1:5,000)

## (2) 調査の経過

計画された工事は、荘厳院A棟（第6次調査6～9区）の南にある現キュービクルを撤去して高圧電線を迂回させ、新たにキュービクルを東に設置して、ケーブルを南の東西築地塀下を東端付近で潜らせて参道側の既設高圧電線に繋ぎ直すものと、築地東端からこれも東西築地塀下を潜らせて南の参道側へ雨水配水管を新設するものであった。調査区は工事ルートにあわせて設けたため、荘厳院棟の南から東西築地東端までの区域（第2～7区）と築地塀を越えた南側の植栽部分（第1区）に分かれた。東西約65m、南北25mの範囲にわたっている。調査区の呼称は便宜的に南東から北西へ順に第1～7区と呼ぶことにした（図5・6）。なお、本調査は特別史跡・特別名勝内での調査であったので、工事掘削で壊されると予想される範囲と深さまでの調査を原則として、部分的な断割りを行って下層の状況把握に努めることとした。



図2 第1区 調査前全景（西から）



図3 第2区 作業風景（北から）



図4 第6区 重機掘削（東から）

的に南東から北西へ順に第1～7区と呼ぶことにした（図5・6）。なお、本調査は特別史跡・特別名勝内での調査であったので、工事掘削で壊されると予想される範囲と深さまでの調査を原則として、部分的な断割りを行って下層の状況把握に努めることとした。

調査は2003年（平成一五）8月18日、築地塀外側の第1区より開始した（図2）。27日からは築地塀内側の第2区（図3）・3区の掘削を始めた。これら第1～3区の掘削は、地表面からすべて人力で行った。一方、9月1日には小型の重機を入れて、第4～7区の表土・盛土の掘削を行った。遺構面は大きく第1面、第2面と地山面の3面と捉え、調査を進めた。17日には再度小型の重機を入れて、第4～7区第1面整地層（整地層）の掘り下げを行い（図4）、第2面の調査に取り掛かった。この間、適宜、実測図を作成し、写真撮影を行って、遺跡調査の記録を作成した。

第1・2区については19日に調査を終了して、工事業者に調査地を引き渡した。工事を先行して始めるため、26日より工事が開始された。なお、この工事では未調査である第1区と第2区間の現築地塀の下部分の貫通工事が行われた。このため、その工事掘削の際に立ち会って、遺構の状況の確認を行った。

調査中の排土はすべて、調査区周辺に積んで

仮置きした。調査後、引き続いて工事が行われることになっていたため、埋め戻しは行わなかった。ただし、第6～7区の第2面で検出した集石遺構と礎石列については、調査終了後工事が行われる前に、遺構保護のためにこれらの遺構が覆われる程度にまで排土による埋め戻しを行った。

10月10日に第3～7区の調査を終了し、機材などの撤収を行い、すべて終了した。

## 2．調査地の位置と環境

### (1) 歴史的位置と立地

鹿苑寺は臨済宗相国寺派に属する禅寺である。舍利殿「金閣」があまりにも有名なために、金閣寺と通称されている。

当地はもと神祇伯家の所有であったというが、1220年（承久二）伯家・仲資王の時に藤原（西園寺）公経の家領であった尾張国松枝庄との交換が成立し、公経は北山第の造営に取り掛かった<sup>1)</sup>。4年後の1224年（元仁元）に北山堂の供養が行われ、「西園寺」と呼ばれるようになった<sup>2)</sup>。藤原公経家を西園寺家と呼ぶ由縁である<sup>3)</sup>。

この西園寺の地を征夷大将軍、太政大臣を辞して出家した足利義満が西園寺家より譲り受け、1397年（応永四）に北山殿の造営を開始し、翌年には義満が室町殿から北山殿に移徙している<sup>4)</sup>。義満は1408年（応永一五）に没し、のち夫人日野康子が1419年（応永二六）に没すると、一部の建物が解体されて南禅寺・建仁寺などの禅寺に寄進された<sup>5)</sup>。こののち、義満の菩提寺として、その法号に因み「鹿苑寺」と改称された。

しかし、応仁の乱に際しては西軍の陣に使用されたため、金閣以外のほとんどの建物が戦火によって失われてしまう。これらの建物は、乱後ある程度復旧されたようだが詳細はわからない。江戸時代に入ると西笑承兌・鳳林承章などが住持を勤め、寺領・寺域と施設の整備に努め、現在のような景観が形成されたようである<sup>6)</sup>。

鹿苑寺は京都盆地の北西、北山の一部をなす左大文字山（標高234m）の南麓に位置する。東には深い河谷を形成する紙屋川が南流している。義満が造営した北山殿は現在の鹿苑寺境内よりもかなり広く、東は紙屋川、北は衣笠山を境として、南は現在の衣笠総門町辺りまでを占めていたと考えられている。

現在の境内は先述したように特別史跡・特別名勝に国指定されており、また1994年（平成六）には世界遺産にも登録されている。

調査地点は、現鹿苑寺の東部、総門の北東域で寺の主要な建造物からはやや外れた位置にあっている。

### (2) 既往の調査

鹿苑寺の境内ではこれまでに9次にわたって調査を実施してきた。いずれも当研究所が調査を

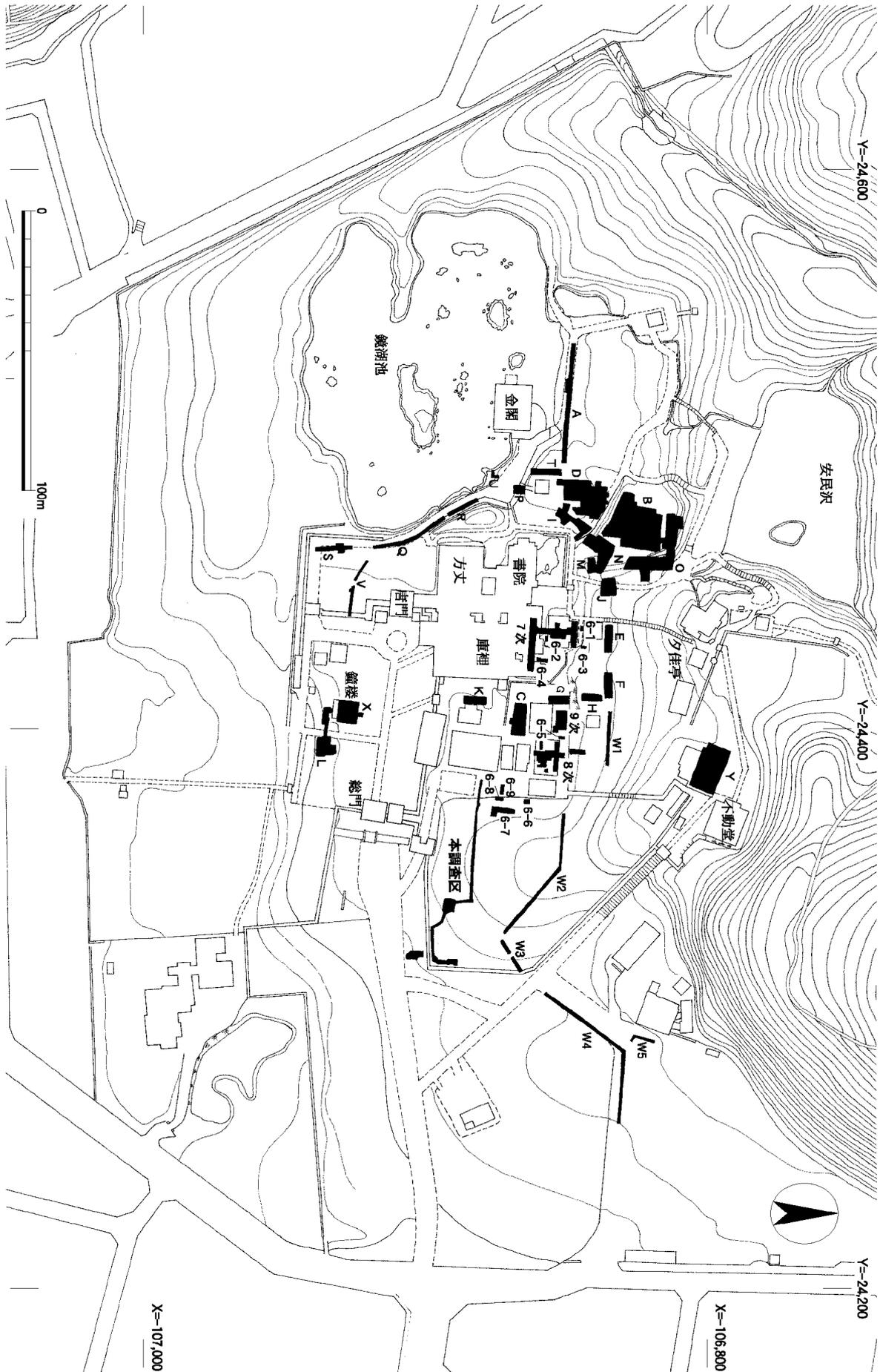


図5 既往調査区および本調査区位置図 (1 : 2,000)

表1 既往調査一覧表

調査回数	調査年度	調査区	調査期間	面積	文献
第1次調査	1988年度	A～D区	1988年10月25日～1989年4月3日	600㎡	1・6
第2次調査	1989年度	E～V区	1989年7月4日～1990年3月31日	722㎡	2・6
第3次調査	1990年度	W1～W5区	1990年5月24日～1990年7月31日	148㎡	3・6
第4次調査	1992年度	X区	1992年11月25日～1992年12月18日	57㎡	4・6
第5次調査	1994年度	Y区	1994年8月23日～1994年10月21日	200㎡	5・6
第6次調査	1997年度	6-1～6-9区	1997年11月7日～1997年12月27日	42㎡	7
第7次調査	1998年度	7次	1999年3月3日～1999年4月5日	115㎡	8
第8次調査	2001年度	8次	2001年4月23日～2001年5月24日	64㎡	9
第9次調査	2001年度	9次	2002年1月25日～2002年2月5日	25㎡	10
第10次調査	2003年度	10-1～10-7区	2003年8月18日～2003年10月10日	98㎡	本報告

(文献の番号は文末の調査報告の番号に対応する)

担当した。それら既往の調査については調査地点図と一覧表で示した(図5・表1)。なお、1988～1994年度の第1～5次調査の成果については『特別史跡特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』(調査報告6)として刊行しており、それらの調査区の名称についてはこれに従った。

本調査地周辺はこれまで調査が希薄な地域であるが、比較的調査地点に近い第6次調査6～9区、第3次調査W2～4区の成果を概観しておく。本調査の6区西端から7区のすぐ北にあたる第6次調査6～9区では、いずれの調査区でも東へ傾斜する地山面に堆積する黄褐色砂層を検出している。この層の上面の標高は6-9区では97.0m、6-7区では96.5m、厚さは0.1～0.15mである。この砂層からは鎌倉時代の瓦が出土しており、西園寺時代の池である可能性が考えられている。一方、第3次調査のW2区では東半で東へ下がる室町時代の池状遺構を検出した。池の東肩には白色の玉石を用いて洲浜が形成されており、底には白色の粘土が貼られていた。また、W2区東端部～W4区西部では、池状遺構の下層で平安時代中期から後期のピットや包含層を検出している。

このような状況から、本調査地点では鎌倉時代あるいは室町時代の池状の遺構、またこれらに先行する平安時代中期から後期の遺構などの検出が期待された。

### 3. 調査の概要

#### (1) 調査区(図6・7)

先述したように、とくに特別史跡・特別名勝内の調査であったため、工事によって遺構などが破壊される恐れのある範囲に限定した調査となった。工事掘削のルートに従い、便宜的に第1～

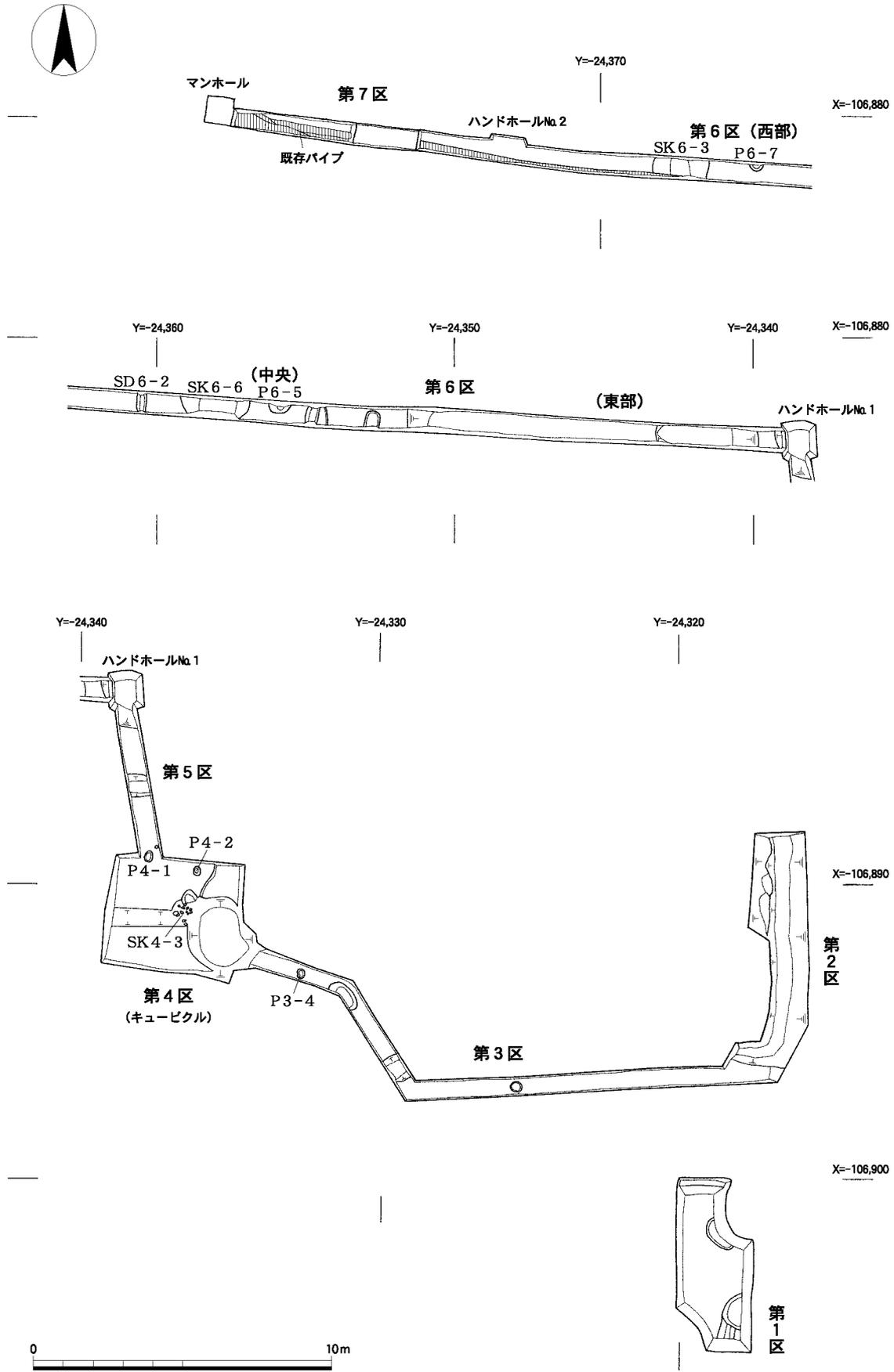


図6 調査区全体図その1 (第1面、1:200)

7区と調査区を分けた(図6)。第1～3区については重機の搬入が困難であったため、地表面から人力で掘削を行った。第4～7区については小型の重機によって表土・盛土を除去し、さらに第1面の掘り下げにも小型重機を用いた。掘削深は第1・2区では地表下1.5mまで、第3～7区では地表下1mを目安にした。下層の状況は部分的な断割りを行って確認するとどめた。以下に各調査区の概説をする。

第1区(図版1、図8) 東西築地塀南側の植栽部分にあたる。北側から築地塀の下を潜った高压電線ケーブルと雨水配水管が参道まで設置される予定の南北方向の調査区である。東西2.5m、南北6mを設定したが、北東角と南西角は樹木の根の保護のため掘削しなかったため、不整な形となった。調査面積は12.5㎡であった。遺構面は出土遺物が少なく時期決定は困難であるが、2面(第1面、第2面上・下面)とした。第2面下面までで工事掘削深に達していたため、これ以下の層に関しては調査区の西端を南北に断割りを行って確認することとした。地表下約2.0～2.4m(標高94.4～94.0m)で北から南へ下がる地山面を確認した(図版1-3)。

第2区(図版2-1・2) 東西築地塀北側の東端、東側の南北築地塀に沿って、雨水配水管の設置が予定された南北方向の調査区である。東西幅2m、南北8.4mの調査区を設定したが、ここでも樹木の根の保護のため調査区が変形し、面積は16.25㎡であった。当地には以前に湿気抜きの南北溝が掘削されていたらしく、調査前より東西幅が3.5mほどの凹みが南北に続いており、調査区はその凹みのほぼ中央に設けた形となった。結果、調査区全体が工事掘削深まですべて江戸時代以降に何度も掘り直された南北溝内部にあたっていたことが判明した。

第3区(図版2-3・4) 東西築地に沿って、第2区と第4区を屈曲して結ぶ高压電線ケーブルが埋設される幅0.65m、総長17.8mの細長い東西方向の調査区である。面積は11.95㎡であった。遺構面は2面、第1面でピット・土壌・溝など、第2面でピット・溝などを検出した。下層の状況を確認するため3箇所断割りを行った。

第4区(図版3・4-1、図9) キュービクル設置予定地で東西4.4m、南北3.6mの方形の調査区である。面積は18.5㎡であった。調査区の中央には既往の高压電線ケーブルが東西方向に埋設されており、また南東部には現代のゴミ捨て穴が深く掘り込まれていた。本区も遺構面は2面、第1面でピット・集石遺構(図版3-1)、第2面で柱穴(図版3-2、図9上段)を検出した。南壁と西壁沿いを「L」字状に断ち割って下層の状況を確認した。第2面の整地層の下面が地山面となり、この面で柱穴を検出した(図版4-1、図9下段)。このため、これを第3面と捉えた。

第5区(図版4-2) 第4区キュービクルから北のハンドホール1に至る高压電線ケーブルが埋設される南北に細長い幅0.7～0.8m、長さ4.7mの調査区で、北端は1.2m四方のハンドホールに接続する。面積は5.5㎡あった。北端からハンドホール部分は現代のゴミ捨て穴が深く穿たれていたが、地表下2mの底部でも地山は確認できなかった。遺構面は同様に2面を確認した。第1面で東西方向の溝を検出したが、これは第2区の溝と同様に江戸時代以降に設けられた湿気抜き溝の一部とみられる。ほぼ中央に1箇所断割りを設けた。

第6～7区(図版4-3・4-4・5、図10) ハンドホール1から西端の既存マンホールを



つなぐ高圧電線ケーブルが埋設される東西方向の細長い調査区である。途中ハンドホール 2 を挟んで東を第 6 区、西を第 7 区とした。第 6 区は幅 0.7～0.8m、長さ 34.5m で、面積が 26.25m<sup>2</sup>、東 1/3 程度は現代のゴミ捨て穴が深く掘り込まれ、遺構面が壊されていた。また、調査途中でこのゴミ捨て穴部分の北壁が崩壊して調査区が埋没したため、その部分について調査を放棄した。第 7 区は幅 0.7～0.8m、長さ 9 m、面積は 7.2m<sup>2</sup>、西 2/3 程度は既存の側溝や高圧電線ケーブルが埋設されていて、遺構を確認することはできなかった。遺構面は 2 面、遺構は第 1 面でピット・土壇・溝など、第 2 面で礎石建物・集石遺構・溝などを検出した。断割りは第 6 区中央以西で 3 箇所行った。

## (2) 層 序

各調査区の層位は細かく分層が可能であるが、概して盛土、整地層、整地層、地山と捉えることが可能である。整地層は、一連の整地と考えるが層の特徴から -1～3 に分けておく。

第 1 区では上から現代盛土（厚さ 0.2m）、整地層（暗褐色～褐色砂泥、厚さ 0.65m）、整地層 -1（灰白色系砂泥～粘土、厚さ約 0.15～0.05m）、-2（黄褐色系泥砂、厚さ 0.35m）、-3（褐色系砂泥、厚さ 0.85～0.75m）で地山に達する。

第 3～7 区では上から現代盛土（厚さ 0.15m）、整地層（褐色～にぶい黄褐色泥砂、厚さ 0.6m）、整地層 -1（灰白色系砂～粘土、厚さ約 0.2m）、-2（黄褐色系泥砂、約 0.2m）、-3（暗褐色系砂泥、0.2～0.3m）で地山に達する。

整地層の上面を遺構面第 1 面とした。白色系の土層（整地層 -1）以下は一連の整地層と考えられ、これを整地層とした。これら白色系の整地層 -1 は整地層上面に施された化粧土と見られ、この上面を遺構面第 2 面とした。これら整地層・はいずれも北西の山裾側を削って、地形的に低い南東側を埋め立てて広い平坦面を造り出すという大規模な造成事業によって形成されたものである。整地層は第 1 区では最も厚く約 1.4m あるが、北西に向け厚さが減じて、第 7 区では地山直上に整地層 -1 の灰白色系泥砂による化粧土が認められるのみで整地層 -2・3 は認められなくなる。

なお、第 2 区については他の調査区とは様相を異にしており、調査区がすべて江戸時代以降の南北方向の溝（湿気抜き溝）の内側にあたっているため、ここでは省略する。

## (3) 遺 構

### 第 1 面の遺構

層序の項で述べたように厚さ 0.6m 前後の整地層の上面を第 1 面とした。この整地層は出土遺物の検討から、室町時代前期、14 世紀末葉から 15 世紀前葉に形成されたと考えられる。この面で検出した遺構には溝、土壇、柱穴、礎石建物などがあり、整地層の形成後、つまり室町時代前期以降の遺構である。

なお、第 2 区では調査区の幅を越える規模の南北方向の溝があって、江戸時代以降、現代まで

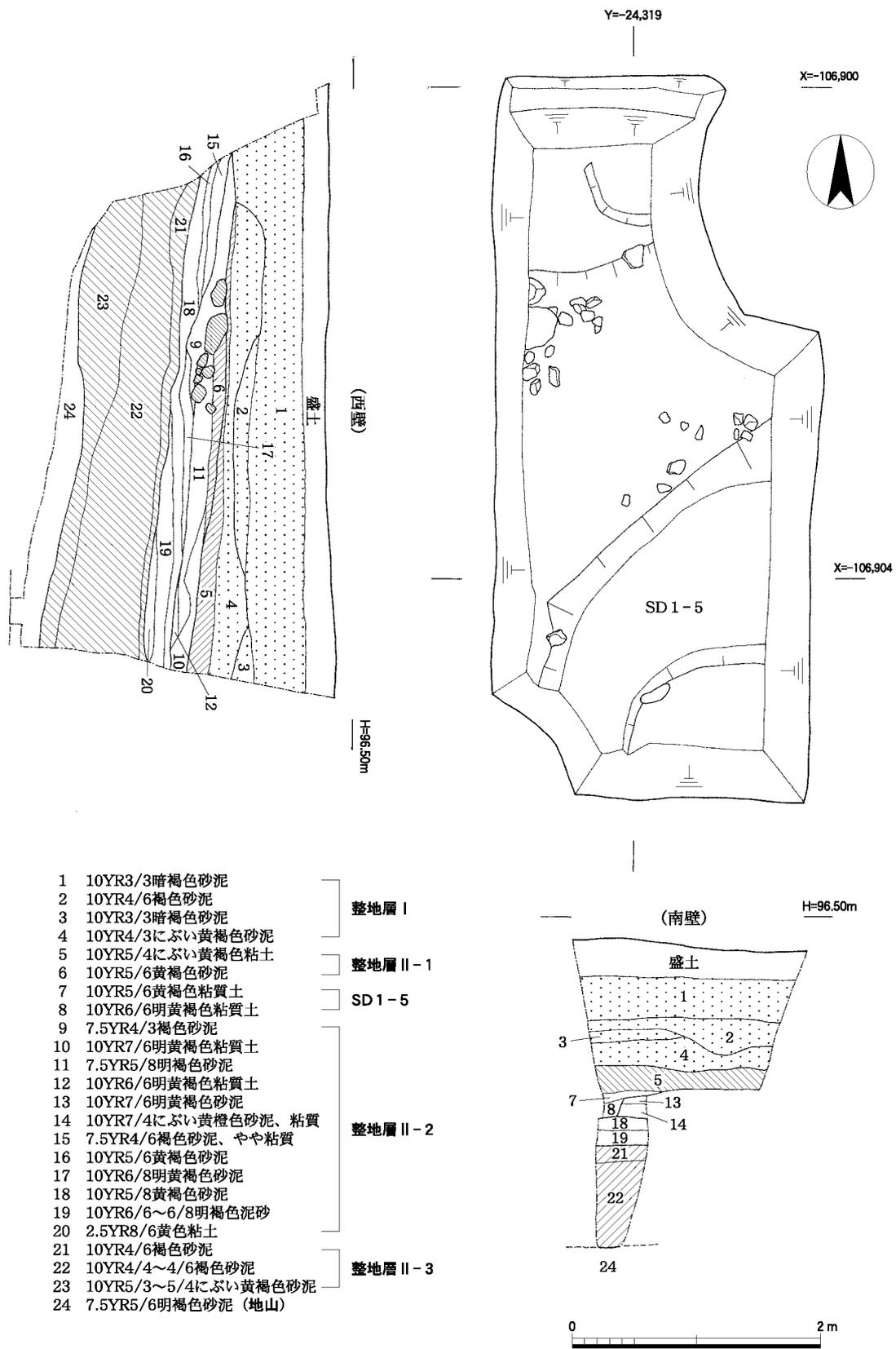
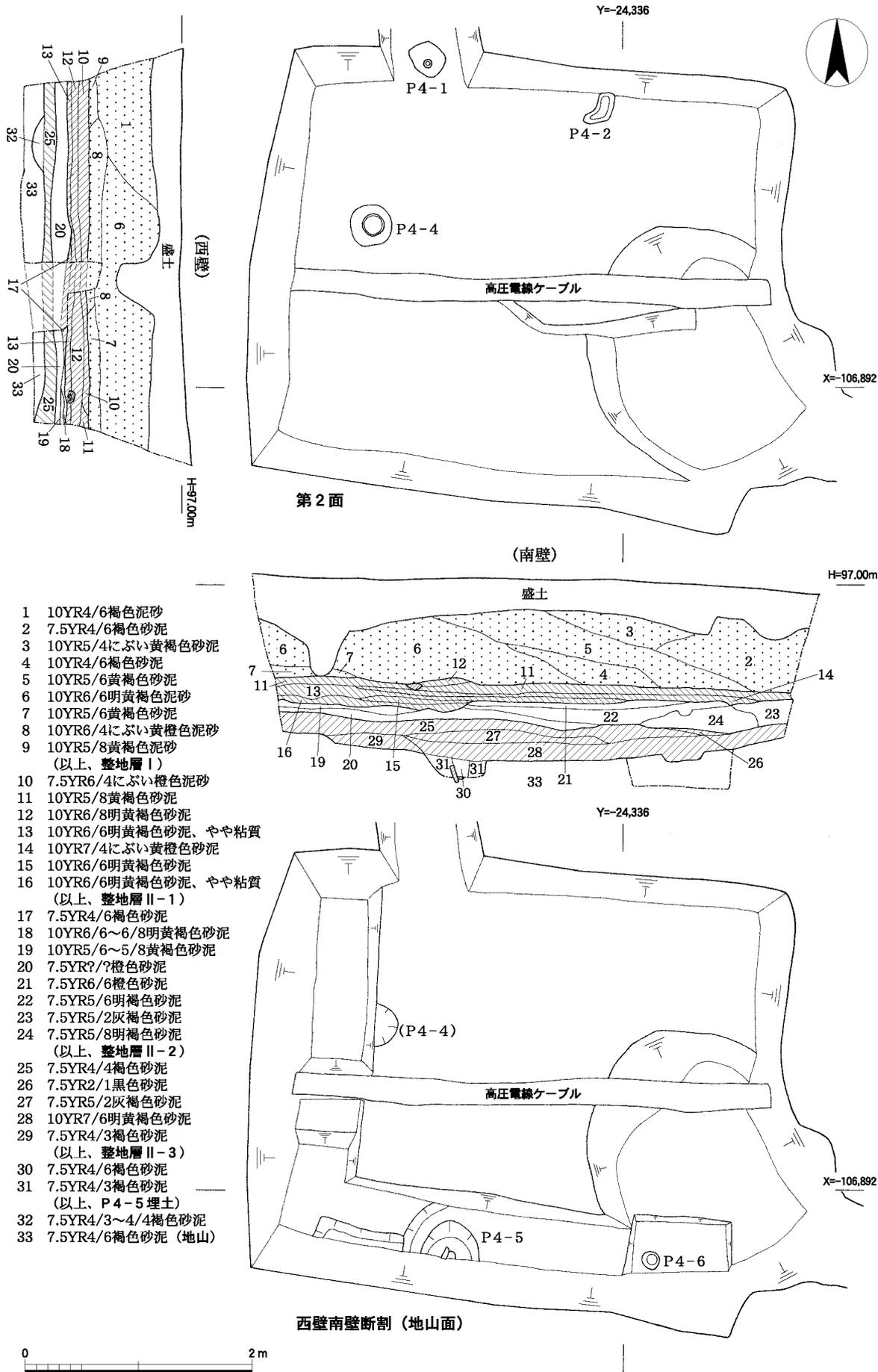


図8 第1区遺構実測図(1:50)



- 1 10YR4/6褐色泥砂
- 2 7.5YR4/6褐色砂泥
- 3 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
- 4 10YR4/6褐色砂泥
- 5 10YR5/6黄褐色砂泥
- 6 10YR6/6明黄褐色泥砂
- 7 10YR5/6黄褐色砂泥
- 8 10YR6/4にぶい黄褐色泥砂
- 9 10YR5/8黄褐色泥砂  
(以上、整地層Ⅰ)
- 10 7.5YR6/4にぶい橙色砂泥
- 11 10YR5/8黄褐色砂泥
- 12 10YR6/8明黄褐色砂泥
- 13 10YR6/6明黄褐色砂泥、やや粘質
- 14 10YR7/4にぶい黄褐色砂泥
- 15 10YR6/6明黄褐色砂泥
- 16 10YR6/6明黄褐色砂泥、やや粘質  
(以上、整地層Ⅱ-1)
- 17 7.5YR4/6褐色砂泥
- 18 10YR6/6~6/8明黄褐色砂泥
- 19 10YR5/6~5/8黄褐色砂泥
- 20 7.5YR?/?橙色砂泥
- 21 7.5YR6/6褐色砂泥
- 22 7.5YR5/6明褐色砂泥
- 23 7.5YR5/2灰褐色砂泥
- 24 7.5YR5/8明褐色砂泥  
(以上、整地層Ⅱ-2)
- 25 7.5YR4/4褐色砂泥
- 26 7.5YR2/1黒色砂泥
- 27 7.5YR5/2灰褐色砂泥
- 28 10YR7/6明黄褐色砂泥
- 29 7.5YR4/3褐色砂泥  
(以上、整地層Ⅱ-3)
- 30 7.5YR4/6褐色砂泥
- 31 7.5YR4/3褐色砂泥  
(以上、P4-5埋土)
- 32 7.5YR4/3~4/4褐色砂泥
- 33 7.5YR4/6褐色砂泥 (地山)

図9 第4区遺構実測図(1:50)

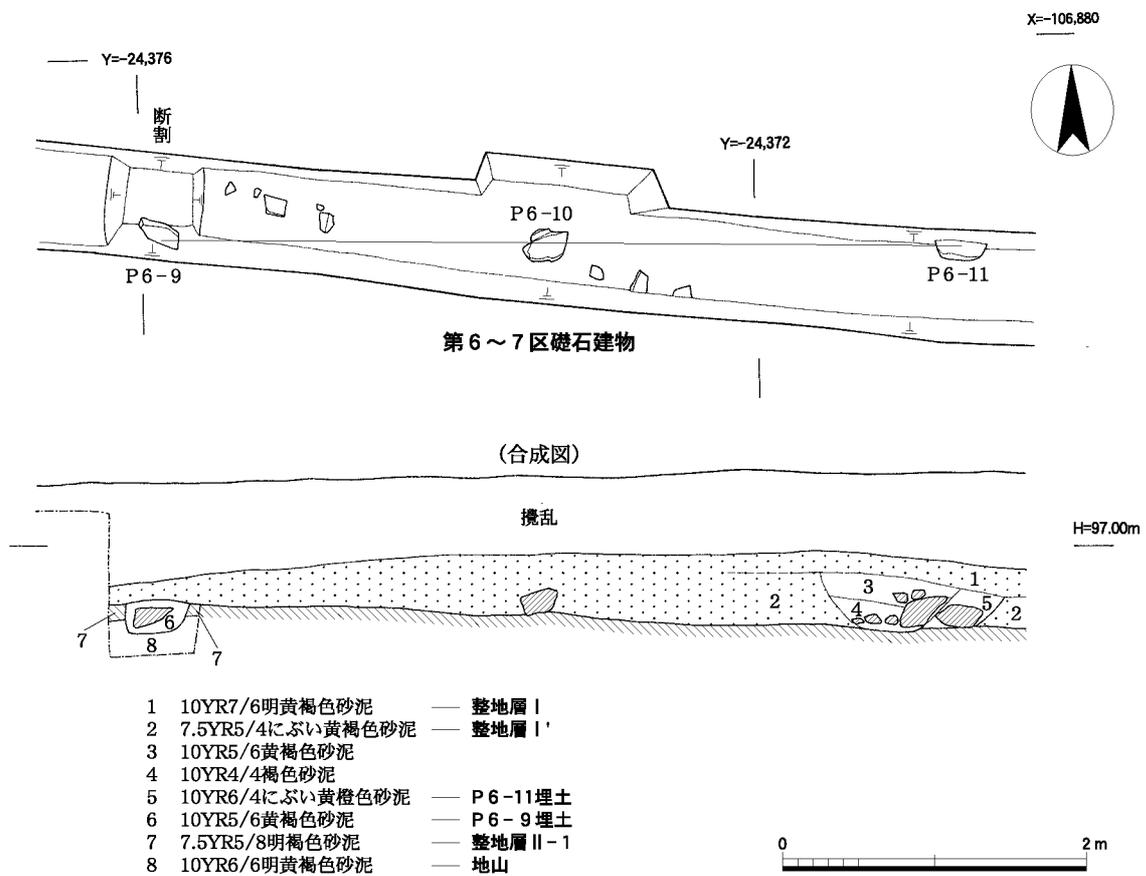
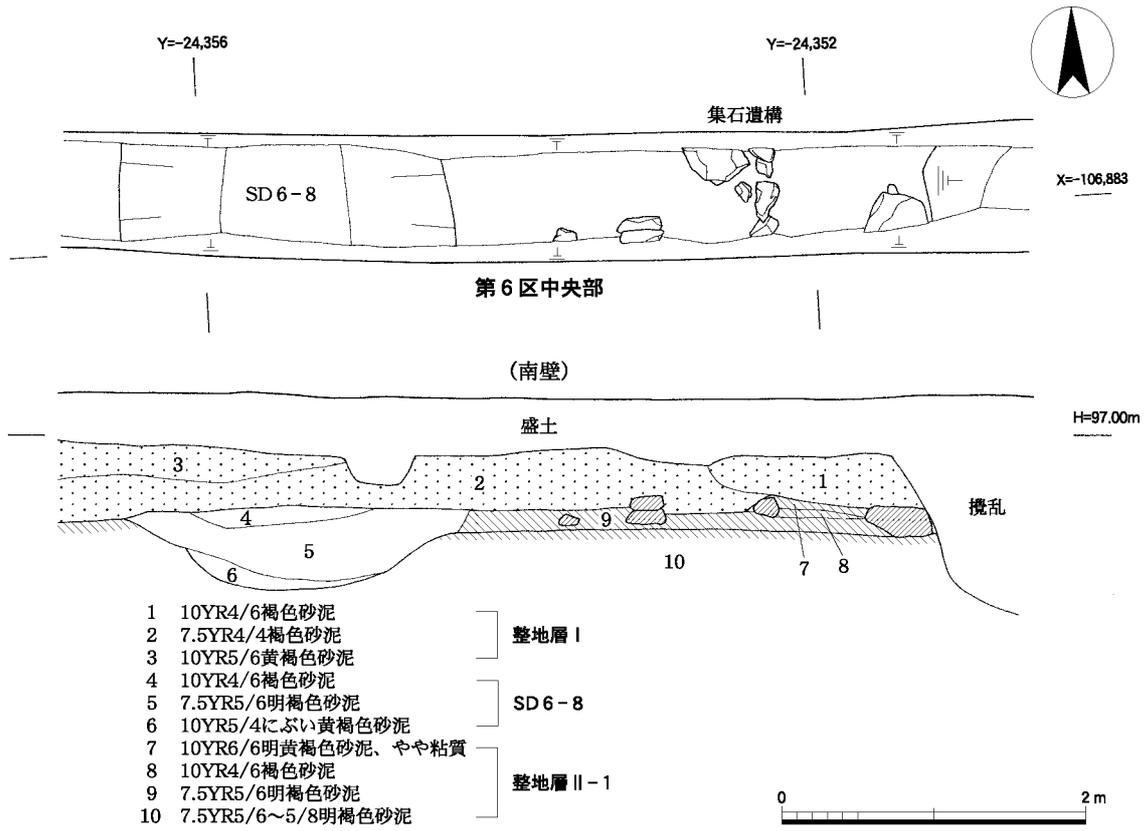


図10 第6~7区遺構実測図(1:50)

何度も掘り直されて湿気抜き溝として機能していたようである。

整地層 断面の観察により、おおよそ北西から南東へ順に土が積まれていた様子がわかり、後述する整地層の時よりもさらに北西の山側を削って盛土を行った整地層と思われる。年代的にみて義満の北山殿造営にあたってなされた造成と考えられる。



図11 土壌SK 4 - 3 検出状況（北東から）

土壌SK 4 - 3（図11） 第4区中央東寄り、既存高圧電線ケーブルの下で検出した。東部を攪乱に切られている。南北1.0m、東西0.9m以上、深さ0.4mの円形の掘形に、0.2m前後の礫を乱雑に充填している。礫に混じって瓦器火鉢の獣脚が出土した。

礎石建物P 6 - 9 ~ 11（図版5、図10下段） 西端の第6 ~ 7区第2層（整地層）の上面で、ほぼ正方位にのった東西方向に並ぶ礎石3石を検出した。柱間2.7mの2間分である。建物としての広がりとは今回の調査区では確認できなかった。調査区の北壁にかかった東端のP 6 - 11の断面を検討すると、この掘形が第1層の途中から切り込んでいることがわかり、第1層と第2層の間に遺構面が存在したと考えられる。したがって、第1面の遺構と考えておく。

#### 第2面の遺構

白色系の化粧土で覆われた整地層 -1の上面を第2面とした。第2面の遺構には溝、集石遺構などがある。いずれの遺構も出土遺物が少ないが、おおよそ鎌倉時代前期、13世紀前半代と考えられ、北山第・西園寺の頃の遺構と想定している。

整地層 層序の項で既述したが、整地層は第1区から第7区までの全域にわたって検出・確認した。この整地層の上面は白色系の化粧土（ -1）で覆われており、おおよそ標高96.5 ~ 96.0mとほぼ水平に調整されている。整地層の下層（ -2・ -3）には平安時代の遺物も含まれており、当地にこの時期にもなんらかの営みがあったことを示している。

表2 遺構概要表

時代	検出面	遺構
江戸時代以降		溝（湿気抜き溝）
室町時代以降	第1面	整地層Ⅰ、柱穴（P4-1・4-2・6-5）、ピット（P3-4・6-1・6-7）、土壌（SK3-3・4-3・6-3・6-6）、溝（SD3-2・6-2）、礎石建物（P6-9~11）
鎌倉時代	第2面	整地層Ⅱ、柱穴（P3-5・3-8・3-9・4-4）、集石遺構、溝（SD3-6・3-7・6-8）
鎌倉時代以前	地山面	柱穴（P4-5・4-6）

溝SD6-8（図版4-4、図10上段） 第6区中ほどで検出した南北方向の溝である。幅2.2m、深さ0.45m、断面はかまぼこ状を呈する。

集石遺構（図版4-4、図10上段） 第6区中ほど、ゴミ捨て穴による攪乱の西、SD6-8の東で検出した。長径0.4～0.5mの花崗岩数石が集中して出土した。検出した範囲では面をなすようなことはなく、石垣・石積みなどとは考えられない。庭園に関連するような施設の一部かもしれない。

### 第3面の遺構

地山面である第3面で検出した遺構には第4区南端、南壁断割り部分で検出した柱穴P4-5・4-6がある。

柱穴P4-5・4-6（図版4-1、図9下段） P4-5は北半分を検出し、東西幅0.5mの円形の掘形で、中央に径0.18mの柱当たりを検出した。柱当たりの底には平坦な石を引いて礎板としている。出土遺物は小片ばかりで時期を決めがたい。P4-6は同様の柱穴であったと考えられるが、その底部の痕跡をP4-5の東1.8mで検出した。この両方で建物の一部を形成していたと考えられるが、出土遺物がなく時期は不明である。

## 4. 出土遺物の概要

遺物は整理箱に17箱出土した。器種には土器類、瓦類、金属製品などがある。大半は瓦類で、ついで土器類となっている。時代は鎌倉時代から室町時代のものが多く、弥生時代以前から江戸時代、現代までおよぶ。金属製品には鉄製の釘類が多く、その他の遺物にはチャート剥片が1点ある。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代以前	石器(チャート剥片)、弥生土器	0箱		0箱	0箱
平安時代	土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・磁器、軒丸瓦・軒平瓦	1箱	灰釉陶器1点、輸入白磁1点、軒丸瓦1点、軒平瓦1点	1箱	0箱
鎌倉時代	土師器・須恵器・磁器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦、鉄釘	4箱	土師器1点、須恵器2点、輸入白磁1点、軒丸瓦6点、軒平瓦3点、熨斗瓦2点	3箱	0箱
室町時代	土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、鉄釘	8箱	土師器19点、須恵器1点、灰釉陶器1点、輸入白磁1点、国産施釉陶器2点、瓦器2点、軒丸瓦2点、軒平瓦1点	7箱	0箱
江戸時代以降	土師器・瓦器・施釉陶器・磁器・染付、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦、鉄器・鉄釘	4箱		4箱	0箱
計		17箱	55点(2箱)	15箱	0箱

(1)土器類(図版6、図12)

土器類には土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、染付、白磁などのほか、弥生土器と考えられる土器片などがごく少量あり、大半は土師器であった。いずれも小片で保存状態も良くなく、個別の遺構からまとまって出土した遺物はなかった。各調査区の整地層・から出土したもののうち、それぞれの年代観を示すものを抽出して図12に図示した。

整地層 出土土器(1~9) 整地層 はいずれの調査区においても、断割りによる確認調査にとどめたので、遺物の出土量が少なく小片が多かったが、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・輸入白磁などがある。これらのうち、灰釉陶器碗(1)や輸入白磁(2)、図化できなかった黒色土器にはA類碗などがあり、平安時代の遺物とみられ、少量であるが整地層形成以前の遺物

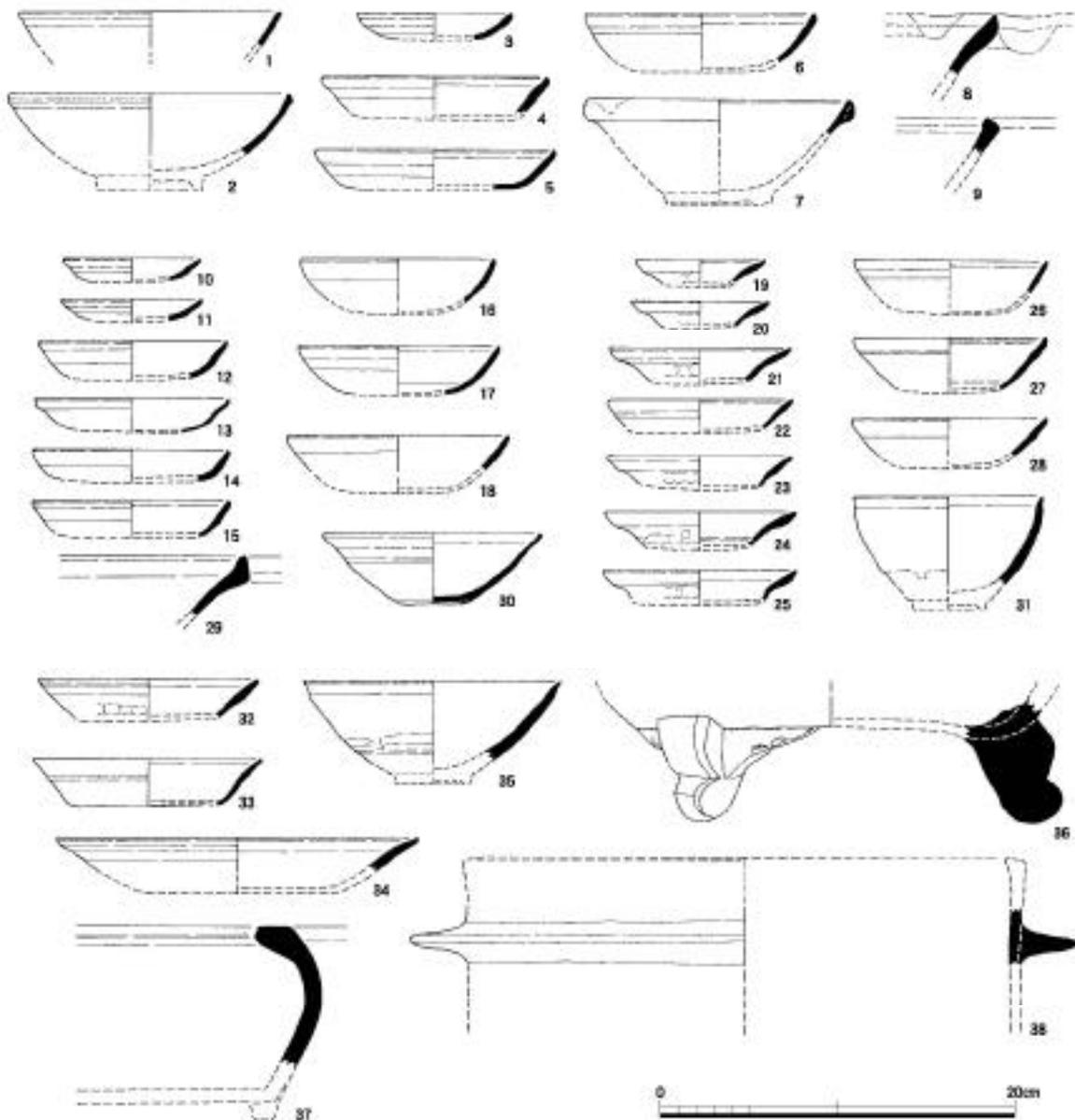


図12 出土土器実測図(1:4)

が混入したものと考えられる。

土師器には赤色系小型皿(3)・大型皿(4・5)、白色系大型皿(6)などがある。黒色土器には図化できなかったが、A類椀がある。灰釉陶器には椀(1)のほか、小型壺の口縁部が出土した。須恵器にはいわゆる東播系の鉢(8・9)がある。輸入白磁鉢(7)は口縁部折り返して玉縁を作っている。鎌倉時代前半代(13世紀前半)の土器群とみている。

整地層 出土土器(10~31) 整地層 は各調査区で検出しており、広域にわたって確認しているが、これも遺物出土量がさほど多くなく、大半が小片であった。土師器・須恵器・瓦器・灰釉陶器・国産施釉陶磁器・焼締陶器などがある。土師器には赤色系小型皿(10・11・19・20)・大型皿(12~15・21~25)、白色系大型皿(16~18・26~28)がある。これらは時期的な形態の特徴から10~18と19~28に大別でき、前者が14世紀後半、後者が14世紀末から15世紀初頭に位置づけられる。須恵器には東播系の鉢(29)がある。灰釉陶器はいわゆる東濃産の山茶椀(30)で、底部は回転系切りののちに高台を貼り付けており、朶痕が明瞭に残る。内面にも重ねられた別個体高台の朶痕が写されており、焼成時に重ねられていたことがわかる。国産施釉陶磁器には瀬戸美濃産の鉄釉天目茶椀(31)がある。体部外面下半は回転ヘラケズリが施される。室町時代前期、14世紀後半から15世紀初頭の土器群である。

整地層 上面出土土器(32~38) 整地層 上面の遺構検出や遺構から出土した遺物である。土師器・瓦器・国産施釉陶磁器・焼締陶器などがある。土師器には赤色系大型皿(32・33)、白色系特大皿(34)などがある。国産施釉陶磁器には瀬戸美濃産の椀(35)がある。瓦器には羽釜(38)、大和産の火鉢(37)と風炉の脚部と考えられるもの(36)などがある。36は第4区SK4-3から出土した。焼締陶器は図化できなかったが、備前産の甕がある。これらは室町時代後期、15世紀後半代の土器群とみている。

## (2) 瓦 類 (図版7・8、図13・14)

瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、ほかに熨斗瓦などが出土している。いずれも保存状態は悪く、丸瓦・平瓦の破片がほとんどである。各調査区から出土したが、第4区の整地層 から最も多く出土している。第2区からは江戸時代後期以降と考えられる瓦類が出土した。

軒丸瓦には蓮華文、巴文と特異な蓮華文がある。

蓮華文軒丸瓦(39) 複弁四弁、間弁は撥形、中房は盛り上らず圏線が繞り、蓮子は1+4である。界線が繞り、外区には珠文が粗く配される。胎土は精良で焼成は軟質。平安京右京七条一坊(鴻臚館<sup>7)</sup>)出土のものと同範。平安時代前期。第1区整地層 (最下層)出土。

巴文軒丸瓦(40~45) 42が左巻きである以外は、すべて右巻きである。界線・珠文を配するもの(40・41・43)、界線を配するもの(42)、界線・珠文ともに配されないもの(44)がある。40は瓦当部裏面に強いオサエ痕が残る。45は縦方向に細長く、道具瓦の一部であろう。いずれも小型で建物の棟か、塀などに用いられたものと思われる。鎌倉時代。それぞれ、40・41：第4区整地層、42~44：第4区整地層、45：第3区盛土出土。

蓮華文軒丸瓦（46） 複弁八弁、中房は一段高く突出する。外区には大粒の珠文を弁に接して配し、その外側に界線が繞る。胎土はやや粗く、焼成は軟質。第4区整地層 出土。『鹿苑寺（金閣寺）庭園』<sup>8)</sup>105、『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』<sup>9)</sup>T13と同文。

特異な蓮華文軒丸瓦（47） 上部を欠いているが横から見た蓮華をモチーフとしたような文様を凸線で表現し、外区には密に珠文を配する。胎土は粗く、焼成も軟質である。

軒平瓦には剣頭文が多く、ほかに唐草文、連珠文などがある。

剣頭文軒平瓦（48～51） いずれも折曲げ技法によって成形されている。平安時代後期と考えられる48が須恵質で硬質である以外は、いずれも軟質で小型である。48は二本の平行線、49は横

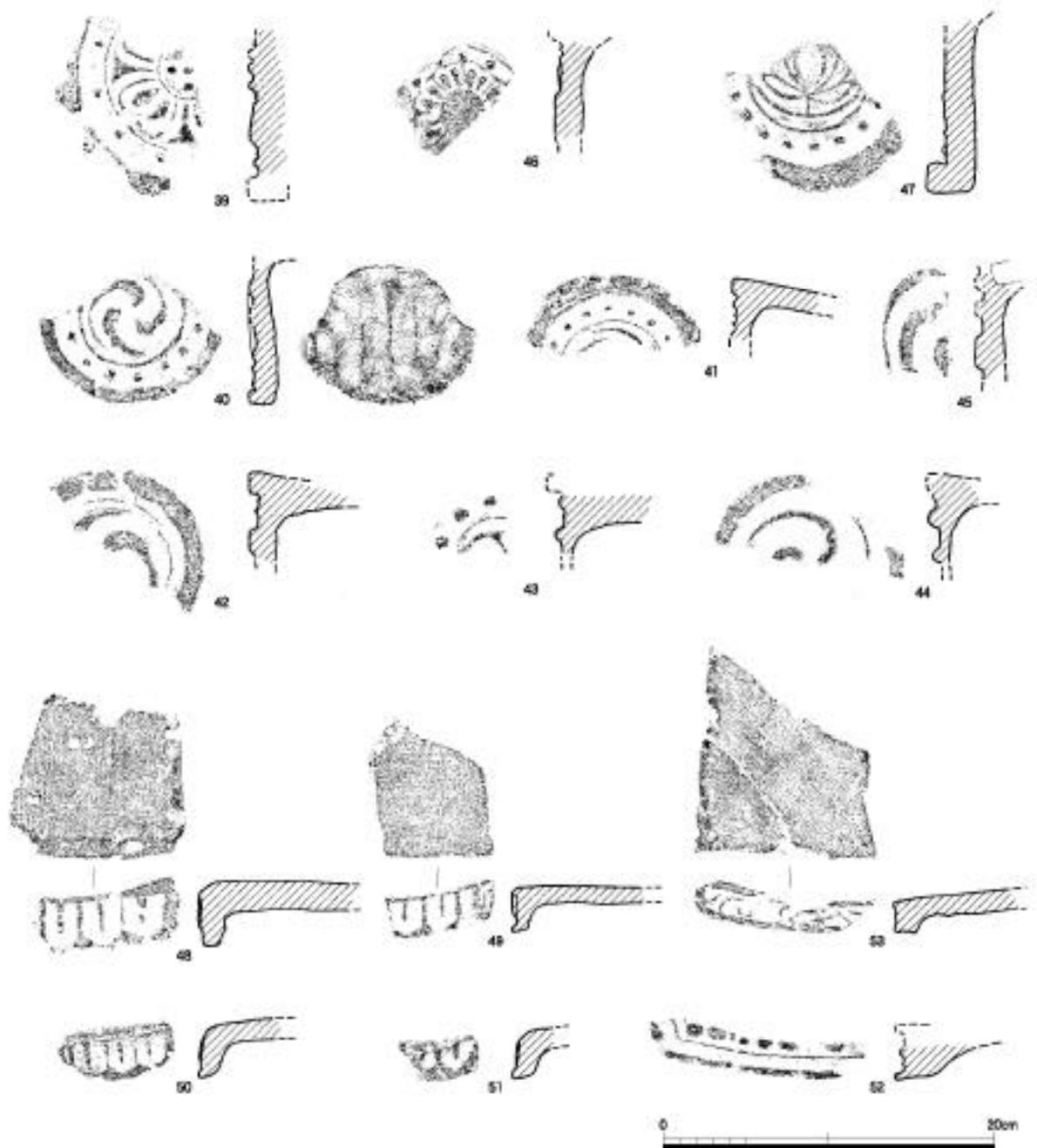


図13 出土軒瓦拓影・実測図（1：4）

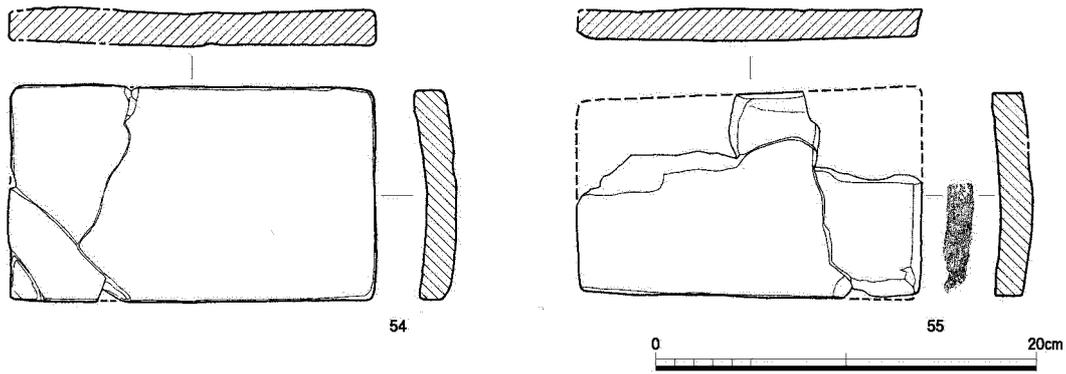


図14 出土熨斗瓦実測図（1：4）

方向と斜め方向の交差する線によるヘラ記号が凹面に施される。50は剣頭文の上端に沈線状の線が横方向に印されている。

連珠文軒平瓦（52） 接するように珠文を密に配し、界線で区切る。段顎の顎部が平瓦凸面との接合部で剥離したもので、上半部を欠損する。胎土は精良で、焼成はやや軟質である。第4区整地層 出土。

唐草文軒平瓦（53） 磨滅が著しいため瓦当文様が不鮮明であるが、唐草文の一種であろう。顎部は段顎、平瓦凹部に二本の平行線によるヘラ記号が施される。胎土は比較的精良で焼成はやや軟質である。第4区整地層 出土。

ほかに、熨斗瓦と考えられるものが多く出土している（54・55）。横11cm、縦18～19cm、厚さ2cmで凸面・凹面をもつ。焼成後に半截されたのではなく、焼成前に側面・端面ともにヘラケズリにより整形されている。大棟などに用いられた規格性が強い製品ではないかと考えられる。54は軟質で残存状況がよくない。55は硬質で、凸面・凹面ともに離れ砂と考えられる雲母片が多く付着している。また、端面に旭日印が1個捺される。いずれも第4区整地層 出土。

## 5.まとめ

本調査は、これまで調査が希薄な地域において、細く狭い調査区ながら東西65m・南北25mにおよぶ範囲において調査を実施した。その成果としては、上・下2時期の整地層を、調査区全域で検出したことにある。これらの関係を整理して、まとめに代えたい。

整地層 は上面が標高97.0m前後、厚さは約0.5mあり、層は北西から南東方向へ重ねられていることが断面観察により明らかであり、北西方向の山裾を削って南東へ順を追って盛土されて形成された一連の整地層である。出土遺物は小片で磨滅したものがほとんどであるが、層内からは室町時代前期（14世紀末～15世紀初頭）を下限とする土器類が出土する。また、この上面の遺構検出や遺構掘削に伴っては室町時代後期（15世紀後半）以降の遺物が出土する。

一方、整地層 は上面の標高が96.5～96.0mと北西から南東へ緩やかに傾斜しているものの、全体的にみれば平坦に整地がなされている。既述してきたように、上面は砂層から粘土層と部分

的に異なるが、白色系の整地層 -1で覆われており、整地層 の化粧土と考えてよいであろう。整地層 の盛土層と考えられる -2・ -3は、第1区では厚さが約1.2mあるが、第6区では -1の下面が即地山となっていて認められなくなる。つまり、大きく南東へ下がる自然地形を埋め立てて平坦地を造り出した後、化粧土（整地層 -1）で表面を覆うという整地が行われているのである。これらの層からは小片で磨滅した土器類が少量であるが出土し、検討の結果、鎌倉時代前期（13世紀前半）頃と考えられる。層の下部からは更に古い平安時代の遺物なども出土している。

本調査の成果からは、整地層 は足利義満の北山殿造営に伴う整地と考えられる。整地層 の上面第1面はおそらく江戸期までは、大きな変化はなく継続的に使用されていたと考えられ、この面で室町時代後期（15世紀中葉ごろ）の遺物が出土することは、おおそ応仁の乱期に西軍の陣として使用されていたこととも符合する。第1面の遺構として第6～7区で礎石建物の一部と考える東西礎石列を検出した。方位はほぼ正方位と考えられ、東端のP6-11を検出した北壁の観察から第1面と第2面の間にもう1面遺構面が少なくとも部分的に存在していた可能性が強い。本調査区では南壁に既設ケーブルの掘形があること、調査区の幅が狭いことなどからうまく掘り分けられなかったが、今後注意が必要である。この建物の面的な拡がりについては不明である。

整地層 は西園寺公経の北山第造営に伴う整地と考えられ、上面が化粧土整地層 -1によって覆われており、少なくとも本調査区の全域に拡がっていることが判明した。この層は先述した第6次調査の6～9区で検出されている東へ傾斜する地山面に堆積する黄褐色砂層<sup>10)</sup>と検出状況や検出の標高などが一致しており、同一の層ではないかと考えられる。この報告で触れられているように池に関する遺構かも知れない。またそうみれば、本調査の北部で行われた第3次調査のW2区で検出されている池状遺構底部の標高は96.3m前後で、白色の粘土、あるいは黄褐色細砂が貼られており、整地層 -1と類似している。報告<sup>11)</sup>では室町時代とされているが、第6次調査とともに一連の遺構である可能性が指摘できる。また、総門の東の平坦面は、第1区から参道を挟んで南の築地堀の手前まで拡がり、段をなして1m以上低くなっている。この段差が何時形成されたか現状では不明であるが、整地層 が少なくとも現況を形成する基礎となっていると考えてよいであろう。

以上のように、本調査では北山殿造営に伴う室町時代前期の整地層、西園寺・北山第造営に伴う鎌倉時代前期の整地層 を検出した。本調査では明らかにしきれなかった池状遺構の面的な拡がりや所属時期、礎石建物の建物としての拡がりとともに成立面などの問題については、今後の課題として周辺の調査に委ねたい。

#### 註

1) 『増鏡』巻五「内野の雪 おほうち山とも」(『日本古典文学大系87』岩波書店、1965年2月)

今後の御父は、さきにもきこえつる右大臣実氏をとゞ、その父、故公経の太政大臣、そのかみ夢見給へる事ありて、源氏中将わらはやみまじなひ給し北山のほとりに、世に知らずゆゝしき御堂を建てて、名をば西園寺といふめり。この所は、伯三位資仲の領なりしを、尾張国松枝といふ庄にかへ給てけり。(略)

- 2) 『百鍊抄』元仁元年一二月二日条  
「前太政大臣供養北山堂、号西園寺、北白川院・安嘉門院臨幸、右府己下諸卿群參、仁和寺宮為導師」
- 3) 『明月記』
- 4) 『足利治乱記』上 「前相国義満公北山別業御建同御移事」  
「同〔応永〕四年ノ春正月中旬ヨリ北山ノ麓ナル西園寺ノ領地ヲ、前相国義満入道々義公御隠居トシテ、西園寺ドニニ八河内国ニテ多ノ領ヲ与ヘラレテ、(中略)四月八日ニ道義公室町殿ヲ、当將軍義持公へ御譲リ有テ、北山ノ別業ニ御移徙ナリ。(略)」
- 5) 『看聞御記』応永二六年一二月一二日条  
「抑聞、北山北之御所宸殿破壊了、南禅寺、建仁寺等御寄進云々、南之御所同破壊」
- 6) 川上 貢「鹿苑寺金閣」『日本建築史基礎資料集成 十六 書院』中央公論美術出版 1971年12月。  
ほかに鹿苑寺の沿革については、赤松俊秀・川上 貢『金閣と銀閣』淡交社 1964年5月、『京都市の地名』日本歴史地名大系第27巻 平凡社 1979年9月などを参照した。
- 7) 平尾政幸・本弥八郎「平安京右京七条一坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1987年3月。
- 8) 調査報告6
- 9) 吉川義彦ほか『臨川寺境内遺跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 1978年3月。
- 10) 調査報告7
- 11) 調査報告3・6

#### 調査報告

- 1 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1993年3月。
- 2 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1994年9月。
- 3 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1994年12月。
- 4 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1995年9月。
- 5 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1996年11月。
- 6 前田義明ほか『特別史跡特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊 1997年2月。
- 7 東 洋一「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1999年3月。
- 8 南 孝雄「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2000年3月。
- 9 東 洋一「第8次調査」『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-9 2003年1月。
- 10 鈴木久男「第9次調査」『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-9 2003年1月。

圖 版

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせき・とくべつめいしょう ろくおんじ (きんかくじ) ていえん							
書名	特別史跡・特別名勝 鹿苑寺 (金閣寺) 庭園							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-6							
編集者名	高橋 潔							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とくべつしせき・とくべつ 特別史跡・特別 めいしょう ろくおんじ 名勝 鹿苑寺 (きんかくじ) ていえん (金閣寺) 庭園	きょうとしきたく 京都市北区 きんかくじちょう 金閣寺町	26100	A105	35度 02分 10秒	135度 44分 00秒	2003年8月 18日～2003 年10月10日	98m <sup>2</sup>	排水主管改 修・高圧電 気引込ケー ブルルート 替工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
特別史跡・特別 名勝 鹿苑寺 (金閣寺) 庭園	特別史跡・ 特別名勝	鎌倉時代・ 室町時代	整地層、礎石建物、 溝、集石遺構、土 壇	土師器、須恵器、瓦器、 焼締陶器、輸入陶磁器、 瓦、鉄釘	それぞれ鹿苑寺(金 閣寺)、先行する西 園寺と考えられる 整地層を検出した。			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-6

特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園

発行日 2003年12月28日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961